

障子戸の明るみ

神野麻郎

ザシキで遊んでいるとサヨさんの声がする。台所のほうです。細長い土間をすつとくぐりぬけてくる、よく通る声だ。茶の間にいたバアちゃんが、「おう、上がつてよ」と応えている。バアちゃんとそれまで話しこんでいたイクちゃんのオバちゃんも、振り向いて、「ごきげんさんで」と丁寧にあいさつするのが見える。

三人はそれからセケン話を始めた。時々、笑い声のはじける。いつものようにバアちゃんは、島の誰かの口調をまねてしゃべっている。早口の怒ったような調子が続けたあと、「……と、まあ、あの人、こないゆうんゼエ」と言つて呆れた顔をする。「ほうカエ」と、話にもう引きこまれているふうな聞き手のふたりはうなづきながらあいづちをうつ。「ほれでなー、ウチはなー、オマエ、なんぼなんでもほんなんゆうもんとちやうゼエ、とゆうてなー、……」とバアちゃんは自分の声に戻つて、ゆっくり相手をさとす調子だ。湯呑の茶をすすり、水屋から出したオハギの残りを食べながら、話し声は波のうねりのように大きくなったり小さくなったりする。でもそのうちにバアちゃんたちは小声になつてハナフダを始めるかもしれない。

開け放した障子戸から、こおばしいような午後の光が差しこみ、畳の上にくつきりと明暗をつくっている。庭の石垣の上の鉢に、夏のなごりのように朱色のオニユリがうなだれ、その後ろのモチの木の間には、前島の屋形のような平らな頂きが浮かんでいる。今日も空は青くて深い。

イッちゃんやハルちゃんとの遊びにも飽きてきたころ、茶の間からバアちゃんたちが立つてきた。ハナフダはしないらしい。

「おう、みなおったんカエ。ごきげんさん」と、目尻にいっぱいシワをつくつてサヨさんが言う。

「学校、もうしもたんカエ。コーちゃん、お母さんから便りあるカエ？お父さんお母さんら、みな伊勢で元気にしよるつてカエ？」

ボクはサヨさんの細い目の奥をさぐるばかりで、何も言わない。サヨさんはだいぶ出っ歯だ。

「天気がええのに、外で遊んだらええのになー。妙な子らじゃ。さあ、みな行きよー。外行つて遊べ」とバアちゃんが邪魔なように言うので、ボクらはばたばたとザシキからホトケさんの間を通り抜け、土間でゴム草履をつっかけて、開け放してある玄関から外へ出た。バア

ちゃんたちはまたアレを始めるつもりかもしれない。アレは何だかわけがわからない。そして、少し怖い。

三人で石段を駆け下りていくと、共同井戸のそばでオバちゃんたちがわいわい話しながら洗濯をしていた。あたりのセメントが黒く濡れて、溝に泡がいっぱい溜まっている。手押しポンプのきしる音、ざあざあ水の落ちる音。石鹸のにおいが鼻をつく。井戸の上の空に、赤トンボがいっぱい舞っている。その羽がきらきら光っている。

何をしようかということになって、イツちゃんが波止に行こうと言いだした。ハルちゃんは、つまらないから帰るといって短いスカートをたたきながら行ってしまった。ボクはイツちゃんとふたりで港まで走った。途中で一度、菓子屋のオオモリの前で立ち止まったが、ふたりとも半ズボンのポケットには一円も入っていないことがわかったので、また走った。少し上り坂になっている漁業組合のところではあはあ息が切れて苦しかった。

波止はちょうど郵便船が出たところで、誰もいなかった。赤ペンキで大きく「スロー」と書かれた向こうの防波堤の横を、たくさん煙を吐きながら出ていく白い郵便船の尻がちらちらと見えたが、すぐ消えてしまった。港内に残った太くて白い泡の道が消えかけている。もう五時半になるまで、郵便は戻ってこない。

ボクらは、陽に灼かれて熱くなったピットに坐りながら、大声で遠くの街のことを話した。「オマエ、知らんだろ」、「ほんなん、ワイ、知つとるわ」と言いあいながら、自分たちの行ったことのある街や知らない街のことをウソや想像もまじえてしゃべり、自慢しあつた。

風いだ海面の下の浅いところには、しましまのギンポが数匹泳いでいる。その下の青みがあったほうにはベラがゆっくり旋回している。釣竿を持ってこなかったことを少し後悔した。港の向こうに、瀬戸を隔てて緑の濃い前島が堂々と坐っている。まだ登ったことがないその平らな頂き付近は、いったい何があるのか、いつものように秘密めいている。反対側のミシリの浜には、陸揚げされた船にペンキを塗っている人が小さく見える。その上手の小さな造船所のほうからカナヅチの音が聞こえてくる。

急にイツちゃんが、近くにつないである伝馬船を指さしながら、大事な秘密をうち明けてやるというように、

「あんなー、ワイなー、オトナになったら、伝馬でアメリカ行くんぜエ」と言いだした。それは前にも聞いたことがある。

「ほんまに行けるんか？」

「行けるぜエ。六十日ぐらいかかるけんどな」

「たいへんやな」

「おう、たいへんやけんどな。……練習しようか？」

「おう、しょう」といって、ボクらは波止の付け根の階段を駆け下りて、伝馬がつないであ

る所まで行った。漁船がすっかり出払ったあとの港に、そのタールの剥げかかった古い伝馬船は一艘だけ所在なげに浮かんでいた。ピットにつないであるそのトモ綱を、ふたりでうんきばりながら引つ張る。なかなか動かなかったが、でも急にほつと杭が抜けたように綱がゆるむと、伝馬は近寄ってきてごつんと岸に当り、ぎいぎいきしんだ。乗り込んでふたりにで櫓杭ろうぎに櫓を取り付けようとしたが、重くてどうしても持ち上げられなかった。それでもボクらは上機嫌だった。船ばたにもたれて板切れで水を掻き、大波だと言って船を揺らした。青く澄んだ空の一部に、鳥毛のような形の白雲がいくつも高くかかって、ボクらはほんとうに太平洋を漕ぎ渡っている気分だった。

「なんしょんな、オマエらは！」

突然耳もとに大声が落ちてきて、ボクらは船の上にひっくり返りそうになった。九さんオッサンだ。すぐそばの岸に仁王立ちになって、いつものようにねじり鉢巻をしたまっ黒な、ぎらぎらした顔でボクらを睨みつけている。「ああ」とボクはへたりこみそうになった。「もうあかん」と思った。九さんオッサンはボクらの間でいちばん怖がられているオッサンだ。学校の教頭先生より怖い。怒りだすと、ヤカン頭からもうもうと湯気が立ってくる。そうだが、この伝馬は九さんオッサンのだったんだ！ボクは目のふちに涙がにじみそうになった。：でも、イツちゃんは気丈に綱をたぐって伝馬を岸に寄せ、オッサンの腕の下をかくぐつて逃れた。すぐにボクもイツちゃんの後から岸に飛び降り、一目散に逃げだした。後からオッサンの手が蛇のようにくねりながらどこまでも伸びてくる気がして恐ろしかったが、なんとか逃れられた。

でもそのことで、イツちゃんもボクも元気をなくしてしまった。壊れた家の中の野良猫に小石をぶついたりしながら、ぶらぶらと集落の中を歩いていたが、つまらなくなつてどちらからともなく別れた。ボクは大回りをして、田んぼのほうから家に帰った。途中で遠くにマコトの姿を見かけたので、たがいに離れたまま大声で悪口の言いあいをした。

大師堂の横の石段を上って台所の土間に入ったら、目がくらんで、何も見分けられなかった。青い空をいっぱい見てきたからだと思った。板の間に上がり、ちゃぶ台のヤカンを持ち上げてその口からお茶をがぶがぶ飲んでいるうちに、ようやく目が慣れてきた。腹が減っていたので、脚立に上り、自在鉤に吊してある籠からふかし芋を取ってほおぼった。

ザシキの方から、言い争うような声が聞こえてくる。

「誰ゾエ、オマエは誰ゾエ。……カエ」とバアちゃんが怒鳴っている。

「いいや、いいや」と誰かが応えている。ひとしきり言いあいが続いた後、話し声がこもりがちになった。やっぱり、みんなアレをやっているのだろうか。

二つ目の芋をほおぼったまま、ボクはそっとホトケさんの間に入った。隔てのフスマを開け放してあるので、ザシキのようすがよく見える。神様を祀ってある床の間を背にして、こ

ちら向きにサヨさんが坐っている。その正面にイクちゃんのオバちゃんが坐り、その左隣りにバアちゃんが、サヨさんのほうを向いて坐っている。みな、座布団を敷いている。障子戸は閉めてある。白く漉されたやわらかな光が部屋の下のほうに溜まっているが、三人の顔かたちはぼやけている。

サヨさんはふつうのようではない。うつ向き加減で目を閉じているようだが、胸の前で合わせた両手が早いリズムで上下し、そしてその何拍目かに大きく揺らしながら、フーツと、荒い息を吐きだしている。その前で、後ろ姿のイクちゃんのオバちゃんは深く頭を垂れ、しきりに手拭いを使っている。泣いているようだ。バアちゃんがサヨさんに向かって厳しい口調で言う。

「オマエな、ほらほんなことゆうたって通らんぜ。……ウチもよう知つとるけんどな、オマエがこっちにおる時分、この子はほらようオマエの世話したぜ。並みではなかったわ。ほれを、オマエ、忘れてしもたんカエ。なんで八年もたってから出てきて、この子にさわったりするんぜ」

話の間、サヨさんはそっぽを向き、やはり強い息を吐きながら顔を歪めている。

「なんぞゆうてみやんせ。ええつ、なんも言えんのカエ？」

バアちゃんの語気はよけい鋭くなる。

「ほら、言えんこともないけんど……」

サヨさんが小声でふてくされたように応える。でもいつものサヨさんの透き通った声ではない。オバアさんのように低くしわがれている。

「なんぞえ。せつかく出てきとんじゃけん、なんでもゆうてみやんせ。聞いたげるわ。ここでお観音さんにも——ああ、ナム十一面観世音ボサツ、どうぞお赦してください。どうぞお力を与えてください」と、バアちゃんはつと神棚のほうを見上げて神妙に言い、合掌する。

「……お観音さんにも、よう聞いてもらわんカエ」

サヨさんは、手を揺らしながらなお考えるふうだったが、急に喉の奥から声を絞りだして、

「しんどいんじゃ」と吐きだすように言った。

「しんどいんカエ。ほうカエ。……オマエは今、どこにおるんな。ええ？」

バアちゃんは落ち着いて言う。

「わからんわ！」とサヨさんは吐き捨てた。そして上体を急に揺らした。

「あーあー、しんどいんじゃ。つらいんじゃ」と、左右に身をよじった。目は閉じたままだ。それから両手で自分の頭を掻きむしると、束ねていた髪がばさつと両側に垂れた。それをさらに掻きむしりながら、

「あー、あー、あー、あー、しんどうてたまらん。あー、あー、もう、つろうてつろうて、たまらん」

サヨさんはもう気が違ってしまったようだ。「あー、あー」と泣きながら、自分の身体を

持て余すように左右に振り、爪で畳を掻きむしった。そして畳にごつんと頭を打ちつけて前に倒れたかと思うと、今度は髪を振り乱しながらぼつと起き上がり、目を剥いて憎々しげにバアちゃんとイクちゃんのオバちゃんを睨みつけた。口の端からだらしなくよだれが垂れている。うつ向いたままのイクちゃんのオバちゃんの肩が小刻みに震えている。

ボクは逃げだそうと思った。でも、足がすくんで動けなかった。これが夢であればいいと思った。実際、これは夢のようだ。ザシキの中には、障子戸を漉してくるいつものおだやかな光はどこにもない。なにか黒雲のような気配、大きな人の姿のような煙りが部屋の上のほうにたまっている。そしてそれが不気味に息をしながら、二人の上に覆いかぶさるうとしていく。どうなってしまうのか……。

そしてふと気づくと、ザシキには泣き声が満ちているのだった。サヨさんの泣き声、イクちゃんのオバちゃんの泣き声、それから誰か知らない人たちの泣き声。そしてボクの泣き声も……。なんだかわけがわからないけれど、悲しくて、みんな泣いている。悲しくて、つらくて、みんな泣いている。

でもその中で、バアちゃんだけは泣かないでいる。手を合わせて、一心に何やらぶつぶつ唱えている。「……エーハンニヤーハーラーミーターコ、シンムーケイゲームーケイゲームー……」と、ああこれは、バアちゃんたちがいつもやっているシンギョウというやつだ。バアちゃんの唱える声は長々と続いた。そのうち、サヨさんがぼたっとうつ伏せに倒れ、横になって、動かなくなった。

倒れたまま荒い息をついているサヨさんの腕のあたりに手をかけて、バアちゃんは耳の遠い人に向かうように大声で、キゼンとして言った。

「オマエがな、しんどのいのは、つらいのは、ようわかった。ようわかったけんなー。ほんで、こうやってな、ちゃんと供養したげるけん、安心しいよー。ほしてな、オマエもお観音さんによくおすがりさんせ。ほしてな、はよう、ええところへ渡してもらわんせよー。もう、二度と迷ってきたらあかんぜエ。この子にさわったりしたら、あかんぜエ。ええなー。ウチらも忘れんように、ちゃんと供養したげるけんあ。ええなー、わかったなー」

依然としてサヨさんは横たわったままだ。バアちゃんの言葉に応えるように、時々身体をけいれんさせたが、それもだんだん収まっていった。乱れた髪が顔の半分をおおい、畳の上によだれを垂らしつづけている。着物の裾がはね上がってふくらはぎがのぞき、座布団は後ろのほうにはじきとばされている。イクちゃんのオバちゃんは、肩の震えは止まったが、相変わらず小さくちぢこまったまま両手を合わせている。

そうして静かになって、ふたりの前に倒れているサヨさんを見つづけていると、ボクは気味が悪いけれど、少しかわいそうな気もしてきた。ひとりだけ、いじめられているようだった。でも、きつとサヨさんは何かの病気なのだ。それで、もう動けないのだ。

そのサヨさんが、わずかにうなづいた。寝ころんだままで、うんうんと頭を振った。

「おう、ほうか。わかってくれたんじゃない？ほうか、ほうか」

バアちゃんがすかさず言う。

「ほな、もういんでツカ。後はちゃあんとしたげるけん、心配ないぜよー。ここ、こうやって開けたげるけん。もういんでツカ」と、バアちゃんは立っていつて障子戸をばたんと開け放った。とたんに表の陽射しが大量に入りこんできてザシキを満たした。ボクは、長い悪い夢からやっと醒めたような気がした。

光の輪の中で、サヨさんがゆっくり起き上がって正座した。そしてふたたび手を合わせた。それはもう上下に揺れない。ややうつ向き加減に、畳の上に視線を落としている。さっきの昂奮がうそみたいなのに、しおらしい感じになっている。親に叱られて泣いた後、なだめられた子供のようだ。顔に垂れた長い髪を、ゆっくり片手でなでつけている。

「はよう、いんでツカよ」

重ねてバアちゃんに促されて、サヨさんは、

「ほな、いなしてもらうわ」とつぶやき、坐ったまま障子戸のほうにいざった。でも途中でたたずんで、なごり惜しそうに部屋の中を見返っている。

「なんぞえ、まだなんぞいいたいことがあるんカエ」

バアちゃんはまた強い調子だ。

「ないわ。いぬわ」

「ええ、はよいなんせ。もう迷てこんようにな」

ふんふんとサヨさんはうなづいて、出口の方にいざっていった。そして後ろ姿を見せて光の中によろよと立ち上がった。その背中に向かい、バアちゃんが合掌して、またシンギョウを唱えだした。イクちゃんのオバちゃんの声も、震えながらそれを追いかける。サヨさんは思い決めたように、えいっと裸足のままで外に跳びだしていった。バアちゃんが急いで障子戸をばたんと閉めた。

障子戸は開け放たれている。こおばしいような斜めの光が、木々の影を映しながら長い脚をザシキの奥のほうまで伸ばしている。

三人は茶の間でまたお茶を飲んでる。また人の声をまねるバアちゃんの話しぶりに、サヨさんはげらげらと笑いころげている。髪はもうきれいに束ねられているようだ。

ボクは玄関の段梯子から二階の屋根裏の部屋に上がって、今日の宿題にかかろうとした。でも何も考えられなかった。それで、いつものように寝ころんで、低い天井の節穴の数をかぞえようとした。でも何も見えないような気がした。さつき見たことの怖さ、気味悪さよりも、その後に胸に残ったなんだかわけのわからない気分のために、またも涙があふれてきそうだった。なんととはなく、生きていくことは、大人になることは、つらいことなのだと思う。サヨさんは、もうだいたいじょうぶだろうか。また道で会ったら、遠くの海に出稼ぎに行つ

ているボクのお父さんやお母さんのことを、笑顔で尋ねてくれるだろうか。

やがて、下のほうでサヨさんたちの帰る気配がした。机の前の小窓から下のほうをのぞくと、イクちゃんのオバちゃんがバアちゃんとサヨさんに丁寧にお辞儀をしている。バアちゃんとサヨさんも互いに礼を言いあっている。それからサヨさんとイクちゃんのオバちゃん
は仲良く肩を並べて、いそいそと坂道を下りていった。

「コー、おるんだろ？おつたら下りてきて、はよう、風呂に水入れよう！」と、段梯子の下のほうからバアちゃんのいつもの声がする。